

新しい英語教育「三ラウンド・システム」

竹 蓋 幸 生
竹 蓋 順 子

1. はじめに

「『使える英語、役に立つ英語を身につけたい』、これは日本人の国民的願望といっても過言ではない……しかしもはや願望だけでは済まなくなりつつある。日本経済新聞の社説（1997）ではグローバル化する世界で国の将来が国民の英語能力に左右される」と指摘されている。さらに朝日新聞の岩村氏（論説委員）は、その「主張・解説」欄で、「国力としての英語力、安全保障の隠れた要素としての英語力、という考え方が必要」とも述べている（岩村、1999）。このように、社会的には英語の習得が非常に強く望まれていることは明らかである。

個人的に見ても、「英語が話せるようになりたい」と望む中学生が93%、一般社会人でも80%を占めており、さらに、本学外国語学部の必修クラスで調査をした結果でも94%の学生が英語を話せるようになることを望んでいるというデータがある。国際化社会と呼ばれる今日、事実上の国際語となっている英語でのコミュニケーション能力を持ちたいと望む学習者は極めて多いことがわかる。

ところが現状の実態を見ると、日本人の英語力はこうした願望や期待に応えられるものとは程遠い。たとえば、英語は数学と並んで嫌いな科目の1位と2位を争っている、そして「英語が話せるようになりたい」と切望する社会人が80%を占める一方で、「英語が苦手」と表明する人が70%もいるのである。

さらに、英語の総合力を評価する際に世界的に使われるテストとしてTOEFL⁽¹⁾やTOEIC⁽²⁾があるが、とくに前者の結果は毎年のように新聞紙上等でも取り上げられ、最近の日本人受験者の平均スコアは504（TOEFL-PBT; July 1999～June 2000）で、世界で最下位に近いなどと指摘されている。一方、TOEIC公開テストでもその平均スコアは564（The Chauncey Group International, 2001/5）にすぎず、一般の大学生の平均スコアはさらに低いと言われている。これらのスコアが他国との比較で相対的に低くても、それが社会で認められるレベルであるならば問題はあまりない。しかし残念ながら、TOEIC運営委員会によれば、これらのスコアは、英語を聞く、話す、読む、書くといった言語活動の四技能のいずれでも「日常会話の挨拶以上のことには対応できない」レベルと評価されている。このような現状にある学習者を大学4年間の指導で、社会から望まれるレベルにまで養成することは決してたやすいことではない。

2. 英語教育の問題点の認識

2-1. 英語教育とダイエット

学習者が英語のコミュニケーション能力を高めたいと強く望んでいるにもかかわらず、全般的に見て成功していない現状が明らかになったが、その原因はどこにあるのか。

「英語教育」と「ダイエット」とは、一見、何の関係もないように思える。だが実は、両者には共通点があるようである。それは、それらに成功しない人の特徴である。具体的には、1) それを実行することは「たやすい」と思っている、そして、2) 地道な努力を「継続できない」人ということである。たしかに、英語教育学は英米文学や英語学の研究者からみると簡単にできるもので、学問ではないと捉えられることが多い。しかし、英語を学習する者も指導する側の者もそのような認識がある限り目標は達成できないだろう。

成功していないと批判され続けている英語教育の現状を打破するために、具体的にはどこに困難点が存在するのかをまず探ってみた。その結果、1) リスニング力の養成、2) 語彙力の養成、そして、3) 極端な学習時間の不足、の3つの関所が英語教育の成功における最大の難所として立ちはだかっていることが判明した。

2-2. リスニング力養成

英語学の説明によれば、英語で使われる音素は50種前後しかない。したがって、リスニング力とは、それが一つ一つ発音器官で生成され、送出されてくるのを順に聞き取っていき、音がいくつか聞き取れたところで語、文などにまとめていけばよいことになる。自然言語のリスニングという行動がこのようなことで済むのであるならばそれは決して困難な行動とは言えず、その技術の習得も造作のないことであろう。

しかしながら、実際はリスニングという行動は、それほど単純なものではないのである。それは、ひとつは英語を話す人の平均的な早さが200語/分であるというデータから見てくる。このデータはそのままではあまり意味がないように見えるが、数える言語信号の単位を「語」から「音素」に、そして時間の単位を「分」から「秒」に変えてみると、「1秒につき10音素」が発せられていることになる。1秒間という短時間に10個の音が発音器官によって生成されているのである。このことにより、一つ一つの音は正確に発音されているはずがない、つまり自然言語の発話には音声信号の「脱落、挿入、変化、交換」等が1秒間に10回も行われているということになる。聞き手は、そのそれぞれを話者の脳の中で考えられていた元の音素に戻して聞き取り、語、文、その内容を認識する。しかも発話音の脱落、挿入、変化、交換等は単純な規則にしたがって行われているわけではない。このような複雑な行動を高速に、数分、数十分にわたって続けるのであるから、リスニング力の養成が容易であるなどということは、実際にはあり得ないことなのである。

ここまで述べてきた音声信号の不規則な脱落、挿入等は、発音器官の不正確な作業によって引き起こされるものであり、コミュニケーションを妨害する要因である。したがって、広い意

味ではChrist (1964) の提唱している physiological noise の一種と考えられる。しかしながら、外国語の音声言語によるコミュニケーションのシステムには、その他にも linguistic noise, physical noise, psychological noise, neurological noise, cultural noise 等の各種のノイズが混入する。このようなノイズによる妨害を乗り越えてコミュニケーションを成功させるためには、聞き取れた音声信号の連鎖を結びつけるだけでなく、逆に、全体の意味から不確かな音声を推測により同定するというトップダウン処理も併行して行わなければならない。

つまり、リスニングとは正確に生成された音声信号が順々に送られてくるのを受信するという単純な行動ではなく、崩れた音声の認識に加えて、言語構造や語彙の知識、それに環境情報や文化的情報、常識等の全情報を「総合的、併行的に処理」した結果として得られるものなのである。したがって、その作業は想像を絶するほど複雑であることを認識する必要がある。

2-3. 語彙力養成

続いて語彙力の養成であるが、たとえば ABC, XYZ という綴りの語を 2 語、「エー・ビー・シー」、「エックス・ワイ・ゼット」と発音し、「アルファベットの最初の 3 文字」、「アルファベットの最後の三文字」という意味だと覚えるのは決して難しいことではない。しかし 1 日に学習する語が 2 語ではなく 25 語になったらどうであろうか。たとえば、25 語を 1 日で学習するとすれば、新しい「綴り」を覚えるだけでも決して楽なことではないだろう。そこに「意味」をつけ、しかも母語とは異なる「発音」の仕方、「聞き取り」の仕方、「使い方」まで覚えるとなると大変な作業のはずである。しかもそれぞれの語の意味は一つとは限らないのである。

それでも最初の 1～2 日くらいは何とかできるかもしれない。しかし問題なのは、成人の自然言語によるコミュニケーションの場合、最低でも約 7,000 語、少し余裕を持つためには約 10,000 語の語彙力が必要という事実である。このようなことは「人間のコミュニケーションにおいては 20～50 語に 1 語程度ならば未知語があってもコミュニケーションが可能になる」という事実から逆算して、さらには学習者の TOEFL 等の得点と語彙力との相関関係を観察して分かることである。

10,000 語の語彙の習得とは、25 語のセットを、学習した語はすべて忘れずに記憶しながら、しかも新出語と既知語との間で混同しないようにして 400 セットも学習する必要があることになる。つまり、リスニング力養成と同様に、語彙力の養成についても高度にシステム化された指導が必要とされるのである。

2-4. 学習時間

母語の習得に関連する時間について、アメリカ人は 6 歳になるまでに 17,520 時間英語を聞いているというデータがある。言語を聞いている時間数は成人してもほぼ同じであるというデータもあるので、18 歳までには約 50,000 時間英語を聞いているということになる。一方、わが国では、中学校入学から高等学校卒業までの 6 年間、英語の授業を受けても英語そのものを聞いて

ているのは1,000~2,000時間、またはそれ以下であろうと推定されている。そうだとすると、日本人学習者は母語話者の1/25~1/50の時間しか英語を聞いていないということになる。したがって、学習時間という側面から見ても、日本人学習者は母語の習得者と比べて大きなハンディを負っていることになる。

このハンディの大きさをよりよく理解するための興味深い例がある。それは、鉄道の歴史の中で見えてくることであるが、わが国で初めて汽車が新橋と横浜の間を走った時、その速度は約30km/hであったと言われている。それに対して、現在の新幹線「のぞみ」の最高速度は300 km/hである。たった10倍のスピード・アップにすぎない。それにもかかわらず、これだけのスピード・アップのためにどれだけの頭脳と研究時間、それに予算を消費したかを調査してみれば、1/25~1/50の教材入力時間のみで実用コミュニケーション能力を養成するということが、つまり、「25~50倍のスピード・アップ」を実現するということがいかに困難なことであるかは想像できるであろう。

3. 英語教育の改善に向けて

3-1. システム科学の導入

これまで、Oral Method, Oral Approach (Audio-Lingual Approach), GDM, Communicative Approachなど、次々と英語教授法が提唱され、日本の英語教育界はその吸収に努力してきた。しかし、その結果、見るべき効果があったとは言えない。こうした教授法が日本人学習者向けに開発されたものではなく、外国で英語を指導するために開発されたものが日本に持ちこまれてきたものであることにも原因があるかもしれない。パーマーの名、その手法が日本の英語教育への大きな貢献として挙げられることはあるが、これも、一握りのエリートのみが進学した時代の成功であり、希望すればほとんど誰でも高等学校、大学に進学できる今日の教育での成功を約束できるかは疑問である。

さらに各教授法の開発過程を観察すると言語学や心理学の理論の影響下に考案されたものが多いが、既存の教授法に対する反省や批判から、局所的な対応にばかり注意が払われ、真の総合的なコミュニケーション能力の養成、とくに日本人学生向けに体系的に構築されたものは見当たらない（奥田，1985；長谷川，1997；他）。

それでは日本人学習者のための新しい指導法を考案すればよいと考えるかもしれない。しかし、その実現の必要を繰り返し指摘されながら長い間そうした要望に応えることはできなかった。少なくとも結果が出なかったということからもわかるように、単純な発想で容易に可能になることでは決してない。そこで我々は、その構想には他の分野で大きな効果を上げている「システム科学」の考え方を導入することが必要であろうと結論した。システムとは、簡単に言えば「要素の集まりで、その要素間あるいはその要素の属性の間に相互関係の存在するもの、そしてそれらが互いに関係しあう形でその機能を果たすもの」と言えるが、さらに具体的には、砂糖に加えた少量の塩が汁粉に真の甘さをもたらす（効果を倍増させる）ような、それだけを

見ると逆効果になりそうな要素までを含めた組み合わせを考えることとすることができる。

3-2. 総合的効果を高めるシステム

総合的効果を高める「システム」を構築するために考察すべきこととしては以下のようなものが考えられる。

- | |
|--------------|
| ◆具体的な目標 |
| ◆要素の収集 |
| ・目的達成に不可欠な要素 |
| ・効果を倍加させる要素 |
| ・副作用を抑制する要素 |
| ◆要素の適切な組み合わせ |

まず目標の設定であるが、英語教育の世界では「異文化や言語の構造についての知識を与え、教養となればよい」という考え方に対して、「コミュニケーション能力という技術力を高める」必要があるという二派が対立した時代があった。しかし、今日の英語教育はそのような二派のどちらかであれば良いといったような単純な考え方では済まない。なぜならば、現代は国際化社会であり、ITの時代である。誰でもがコミュニケーションの手段としての英語、国際語としての英語力の習得を望んでいる。このような時に教養を与えたというだけで社会や学習者が満足するとは考えられないし、実際に大きな不満の声があるからである。

一方、技能にしても、内容のない発言や単純な日常会話の能力養成だけで満足される時代、社会ではない。つまるところは、両者にバランスのとれた指導をすることが必要と言うことであろう。ただ、内容といえば文学、構造の知識といえば言語学といった考え方も単純、矮小にすぎるであろう。したがって、旧来のカリキュラムのなかでバランス良く指導するといった程度の改善では真のコミュニケーション能力の養成指導にならないこともまた事実である。

上記のようなことを考慮しながら何をどのように指導することが国際化社会で、IT時代に望まれる英語教育であるかを考察して、それを後述する広義の三ラウンド・システムの構想に当てはめてみると、少なくとも以下に示したような具体的な目標、指導分野、指導方策の導入が必要になる。

◆目標の設定

コミュニケーション能力の養成（とくに各種ノイズの中でのコミュニケーション能力の効率的な養成）

段階的な目標の設定（最終的な目標だけでなく、短期、中期、長期の目標）

◆不可欠な要素

発音（文字、綴り）、語彙、文法等のバランスのとれた指導

聴解，読解，話すこと，書くことの適切な順序でのバランスのとれた指導

ノイズ対応策の指導（音声言語の編集的情報処理法）

コミュニケーションの「技術」とコミュニケーションの「内容」の指導（常識的事項，自身の文化，異文化，等）

◆効果を倍増する要素（容易な学習，強固な定着，使える技能の育成）

教材の精選（ニーズ，興味，有効度を考慮する；抜け，重複をなくす）

四技能間，その他での転移の活用（理論的に考察された学習計画の必要）

適切な動機づけ，強化の提示（不断に与えつつける）

タスク間に有機的関連をつける（困難なタスクを容易にする）

分散学習の導入（強固に定着させる）

マルチメディアの活用（virtual realityの中での指導，動機付けと定着）

◆副作用を抑制する要素（負荷過大の回避）

教材の精選（難易度の適正化）

タスクを分割し，斬新的に難易度が高くなるタスク群とする（困難なタスクを容易にする）

各種情報を分散してタイミングよく提示する

ゲーム的な面白さの要素を抑える

CALLの場合，キーボードの操作に注意をそらさせない

◆要素の適切な組み合わせ（総合的行動）

必要な「教材」（レベルが高い）を「指導法」で易しいと感じさせながら学習させる

難しい課題をいくつかの容易な課題の組み合わせで容易に解決させる

機器の活用による擬似コミュニケーション活動を行わせる

友達と対話訓練を行わせる

ネイティブ・スピーカーと対話訓練を实践させる

このようなシステムの展望をもって開発された三ラウンド・システムは，1）学習者の大きな学習能力を引き出し，2）引き出した学習能力を減退させず，継続学習を可能にし，3）学習したことを強く定着させ，さらに，4）学習した結果が実際の場面で使える能力となる，しかもそれを，5）効率的に学習させる，という期待された結果を実際に生み出している。それは学習者の感じる成就感にも強く現れているが，それだけでなく外部の客観テストの結果でも，TOEFL-PBT 647，TOEIC 930という最高到達点，しかもTOEFL 580，TOEIC 900以上の得点取得者が多数（受講生の約10%）出るという結果となって現れている。

4. 三ラウンド・システム

4-1. 言語活動の目的

学習者が英語学習に積極的に取り組めない理由の一つとしては「教材に興味を持ってない」こ

とが挙げられている。効果的な指導を行うための一つの重要な要素として、学習者が興味、関心を抱けるような素材を教材として選定すべきであることがわかる。さらに学習者は能力的にも年々多様化してきているため、彼らの興味、関心、ニーズ、それに能力に対応するには「豊富な、バラエティに富んだ」トピックやジャンルの素材を準備する必要がある。大枠では、とくに大学生のニーズを考えれば、以下のような分野をカバーする必要がある。

1. 海外出張や海外勤務、それに海外旅行などで英語圏に行くときに「生活」上、最低限必要になる対話および読み書き能力 (EGP)
2. 国際的な「情報」の直接的な収集のために、テレビやラジオ、新聞での英語によるニュースや、インターネット上の情報等を理解し、自分でも簡単な情報を発信する能力 (EGP)
3. 英語のテレビドラマや洋画、トークショーなどを「楽しむ」能力 (EGP)
4. 大学、企業等、特定の専門分野で英語を使いながら「活躍」するための能力 (EAP, ESP)

ニーズ、能力への対応のみでなく、このような中で学習者の興味、関心を満たす内容、ジャンルの素材、つまり認知レベルに適した素材を教材として使用することにより、学習者は学習意欲を高め、学習に主体的に取り組み、そのことが学習内容を強固に定着させることに繋がるという良い循環をもたらす。

4-2. 狭義の三ラウンド・システム：中核システムの構造

三ラウンド・システムは、効率的な指導を可能にすることが既に繰り返し実証されており、その高い効果が報告されているが、この中核システムは、1) 教材の選定法、2) 教材の提示法、3) 情報群とその提示法という3本の柱からなる。そして、教材を断続的に3回(第1～第3ラウンド)提示し、その各ラウンドに、相互に有機的な関連があり、かつ難易度が漸進的に高くなるタスク(問題解決作業)を課すことが「骨組」である。それらのタスクに学習者が積極的、主体的に取り組んでいくことを助けるために与えられる5種の情報群が「肉付け」となる。教材化する素材は、学習者の認知レベルに合わせ、興味、関心の持てる内容、ジャンルのものを選定することを基本としている。

3回のラウンドのそれぞれには、徐々にレベルが高くなり、かつ互いに関連のある「学習目標」が設定されており、その目標の達成を目指して「タスク」が与えられる。タスクやタスクの達成を助ける情報群の内容自体に加え、それらを提示する順序やタイミング等、細部にわたるまで厳密に定義されている。教材を準備する側のこのような配慮により、難易度の高いとされる素材を教材として扱っても、学習者に与える心理的な負荷は最小限に抑えられ、しかも効果的、効率的な指導が実践できるのである。

各ラウンドで課されるタスクは基本的には以下のような理念の元に作成されている。そのようなタスクを実践させる理由は括弧内に示した。

- 第1ラウンド：内容をだまかに理解させるもの（以降のトップダウン処理のためのデータを頭に入れさせる）
- 第2ラウンド：言われていることを正確，詳細に理解させるもの（以降のボトムアップ処理のためのデータを頭に入れさせる）
- 第3ラウンド：話者の意図，態度，話の結論等を理解させるもの（編集処理の訓練をさせる）

肉付けとなる5種の情報群は，基本的に以下のようなものが作成される。

- 事前情報：スキーマ，コンテキスト関連の情報（指導前に提示する）
- ヒント情報：タスク達成のための考え方の道筋など（タスク遂行時に利用させる）
- 参考情報：教材中に出現する語彙や熟語関連の情報（主に第1ラウンドで利用させる）
- 補助情報：コミュニケーションの技術，異文化関連情報，文法的な解説，重要事項のまとめなど（主に第2ラウンドで利用させる）
- 発展情報：当該教材中には扱われていないが，似たような場面やトピックで使用できるコミュニケーション活動関連の知識など（主に第3ラウンド終了時に提示する）

この指導理論は，古典的学習理論，オペラント学習理論，認知理論，それに分散学習などの，学習を促進させ，確実に定着させると考えられる理論，方策をシステム科学の手法で組み合わせ，学習目標が効率的に達成されるように構成されたものである。

これらの各学習理論の利用方法については，竹蓋幸生（1997）に次のように説明されている。適切なコンテキストのなかで教材提示を繰り返すということは，古典的学習理論の考え方の応用である。各種情報を与えながらタスク（問題解決作業）をさせるということは，認知理論に基づいた手法である。教材やタスクの難易度を的確に制御することによって成就感を与えるということは，オペラント学習理論の考え方の応用である。さらに，同じ教材を三ラウンドに分けて断続的に提示することは分散学習の考え方である。このように指導法の骨格の背景に理論的な裏付けが幾重にも組み込まれていることが他の指導法と三ラウンド・システムの中核システムとでは大きく異なる。

4-3. 三ラウンド・システムを採用した場合の難易度の変化

教材を厳選し，タスク間に相互に関連を持たせ，各種情報とともに提示する最大のねらいは，学習者に難しい素材を易しく感じさせながら学習させ，さらに学習結果を着実に定着させることにある。そのようなことが可能になる理由を以下に示す。

まず，ある教材で学習する素材の難易度を「1」とした場合，教材を3回断続的に提示するので，その各回の到達目標に段階的な下位目標を作れば，学習者はタスクの難易度を各ラウンドでは最終目標の1/3程度にしか感じなくて済むようになる。しかし，三ラウンド・システムでは各ラウンドの学習目標は漸進的に難易度が高くなるものであるから，理論的には下位目標の

難易度を1/6, 2/6, 3/6といった配分にすることができることになる。しかも各ラウンドの学習目標は相互に関連のあるもので前のラウンドでの学習が次のラウンドの学習を容易にするものである。したがって単独では2/6の難しさのある第2ラウンドの学習, また3/6の難しさのある第3ラウンドの学習は, 学習者が実際に各ラウンドの学習をする時点では, いずれも1/6の難しさしか感じないで済むようになっている。つまり, 結果的には終始, 元々の素材の難しさの1/6程度しか感じないで学習を続けられるという計算になる。

このような厳密に制御された構造で配置されるタスク群に加え, バリエティに富んだ5種の情報を各ラウンドの作業中やその前後に準備してあるので, これらを学習者が利用することによりタスクの実践はさらに容易になる。このため, 分散学習とタスク間の有機的な関連のために1/6にまで下がったタスクの難易度を, 理論的には, さらに1/12(ヒント情報により), 1/24(その他の情報により)に感じさせられることができるようになる。こうした配慮により, 三ラウンド・システムは難しいけれどもニーズが高く, 学習する必要がある素材を, 実際よりもかなり易しいと感じさせながら学習を進めさせることを可能にするのである。

4-4. 三ラウンド・システムで長期指導実践をした効果

次に, 上記で概説した三ラウンド・システムの指導理論を採用し, 開発した教材を使用して長期間, 指導を実践した結果について述べる。まず, 千葉大学教育学部の英語教員養成課程の学生の入学時のレベルはTOEFL 475程度であるが, 1年間の普遍教育で510前後にまで向上する。その後も三ラウンド・システムによる学習を続けると, 3年次, 4年次の2年間(実質的には年間, 半期ずつの指導)で, 上位群, 中位群, 下位群はそれぞれの平均到達スコアがTOEFL 545, 565, 580にまで達するという検証結果が出ている。

ちなみに, このようなスコアや指導効率, TOEFLやTOEIC向けのテスト対策をした結果でなく, 学生にとって必要な基礎英語力をつける総合的な指導をした結果であり, その応用力としてこのようなスコアが得られたものである。

4-5. 三ラウンド・システムと他の指導法の指導効率の比較

1995年までの千葉大学での聴解力養成用コースウェア(中核システム)による指導は学習開始時のレベルがTOEFL 500までの被験者を対象とした指導であった。この場合, 平均約20時間でTOEFLに約30の上昇(練習効果を含む)が得られた。それ以降の複合システムによる指導は学習開始時のレベルが主に500以上の被験者を対象とした指導であったが, このグループへの指導には実質約70時間かけた。その結果, TOEFLに約28の上昇が得られたのであるが, 語彙指導に時間がとられた分, 学習時間が増えたということである。

一方, TOEIC Score Recipients' ManualにはTOEIC 300から700までのケースを例示しながら, 「スコアを100(≒TOEFL 30)上げるには220~230時間かかる」と指摘している。またChilds(1995)も, Saegusa(1983,1985)やKitaoka(1992)他を引用しながら以下のように述べてい

る。

... in the TOEIC range of around 730, a gain of one TOEIC point would require about 2.5 hours of teaching. ... Some experiences reported by Kitaoka (1992) suggest an even greater level of difficulty in the 700-800 range: about 3.6 teaching hours to raise a TOEIC score one point. ... The ETS (1990) observes that the difficulty of achieving TOEIC score increases out of proportion with the level of the score: ...

以上のような指摘をもとにして、我々の指導で指導開始時のTOEFLが500未満であった被験者群を仮に初級～中級者（実験群）、TOEFLが500以上であった被験者群を上級者（実験群）、そして他の研究者による指導を統制群と仮に考えた場合の学習効率を観察した。

この観察により、「中核システム」（聴解力養成用コースウェア）を使用した学習および「複合システム」を使用した学習の効率を「他の指導法」により学習した学習者の効率と比較したということである。その結果、他の指導法ではTOEFL 500以下の学習者（初級・中級者）でもそのスコアをTOEFL 30（≒TOEIC 100）向上させるのに220～230時間、それ以上の場合（上級者）は360時間、または”out of proportion”と表現されるほど、さらに多くの時間がかかると言われている。これに対して、本研究の被験者の場合、指導開始時のレベルがTOEFL 500未満の被験者は約20時間、500以上の者でも約70時間しか必要としない、つまり指導効率は他の指導法と比べて、平均5～10倍であることが判明した。

4-6. ミラウンド・システムの教材を使用した学習者による評価

ミラウンド・システムは、可能な限り効率的に英語総合力および語彙力の養成を行うことを目的としている。しかし、現状の学習者の能力レベルと、目指す目標レベルの間の大きな差を考慮すると、短期間で目標に到達させることは不可能に近く、指導は長期にわたり続けられることが予測される。

そうすると、実際に指導が長期化したときに浮上する問題の一つとして、学習者が学習意欲を持続させられないことが挙げられる。学習開始当初は、教材や学習メディア等に対する物珍しさなどで動機づけがなされて学習に取り組み、効果が現れることもある。しかし、学習が長期化すると、珍しさが薄れたり怠け心が生まれたりして、学習を行っているポーズはあっても真の「学習」は行われておらず、効果は見られなくなるということは珍しくはない。

こうした現象を回避するためには、学習者に学習の成果を実感させなければならない。決してテレビゲームのような面白さ、目新しさだけではなく、集中力を持って学習に主体的に取り組ませ、成就感を持たせることで継続的な学習を楽しいと感じ、知的好奇心を維持させられるようであればならない。ミラウンド・システムに基づいた指導では、そうした人間学習者の心理状態に配慮し、長期的な学習にも耐えられるよう、学習の諸段階において常に心理的負担

が軽くなるような方策が立てられていると同時に、学習者が積極的な学習活動を行えるようなKR情報 (Knowledge of Results) の提示と動機づけが定期的に行われる。

我々は、1998年度、1999年度に文部科学省大学共同利用機関メディア教育開発センターと共同で狭義の三ラウンド・システムの構想を導入したCALL教材 (CD-ROM) を5枚制作した。これらの教材を試用した京都大学の学生の約80%が2年続けて(1999年度、2000年度)「英語を勉強した気になる」、「もっとこのような方法で勉強したい」と回答したという京都大学の水光雅則教授の報告がある。東京大学や京都大学で授業に満足している学生が30%前後しかいないと指摘されている中で、このように多くの学生が満足している事実は注目に値するであろう。

実は、この指導法による指導は効果、効率が高いだけでなく、学生の持つ心象も良いことが千葉大学での実験的指導で以前から明らかにされていたので、筆者が講師をしていた中高教員向けの文部省英語教育指導者講座等でも勧めたのである。しかし、受講生たちは三ラウンド・システムでの指導の準備の大変さ、指導自体の大変さを嫌ってか、そのときは受け入れてもこの方法による指導を継続的に実践する教師は少なかった。そこで筆者らは、教材と指導法を一つにしてパソコンで指導できる手法としてのCALL (Computer-Assisted Language Learning) を選び、そのための教材作りを開始したという経緯である。皮肉なことに、複雑すぎるとして人間教師が実践を渋った三ラウンド・システムの理論にもとづいた指導を、高度な情報処理機としてのマルチメディア・パソコンが可能にし、学生のやる気を高め、しかも高い学習効果をもたらしたのである。

5. 広義の三ラウンド・システム：中核システムから包括システムまで

5-1. 複合システムの構造

複合システムとは、狭義の三ラウンド・システムの指導理論に基づいて作成された聴解力養成用コースウェアと語彙指導用コースウェア (中核システム) を、「学習させる日程やKR情報の与え方を含めて、分散学習の考え方にしたがって体系的に組み合わせたもの」である。複合システムは、これを使用することにより、聴解力養成用コースウェアのみの指導で可能であることが検証されてきた到達レベルよりも「高い目標」への到達を可能にする。またそれは、聴解力養成用コースウェアのみの指導で可能になるよりも「数多くの新語を、より効果的、効率的に指導」できる。

5-2. 総合システムの構造

総合システムとは、中核システムである「聴解力養成用コースウェア」、語彙力養成用コースウェア、さらにこれらを組み合わせた「複合システム」を要素として組み合わせ、大学入学時のTOEFL約425という低レベルから、卒業時まで学生全員の平均で550以上のレベル(英語圏の大学に留学可能なレベル) へと到達させるための、長期的な指導を可能にする英語教育システムのことである。

総合システムの全体枠は、興味と同様に、能力的にバラツキの大きい現代の大学生が自分に適した難易度の教材が選べるよう、最低、5種類のトピック・ジャンル別、5段階の難易度レベル別、計25種の教材から構成されることが構想されている。現在は、25セットのうちの8セットの教材（CALL教材）が完成している。

5-3. 包括システムの構造

最後に、複合システム、総合システムよりさらに上位の英語教育システム、「包括システム」の構造について簡単にまとめておきたい。この総合的な包括システムは、英語教育の長期的な目標として異文化理解や自国の文化理解の上に立ち、十分な発信力を含めた実用の総合的なコミュニケーション能力を養成することを目指して構想されたシステムである。狭義の三ラウンド・システムである中核システム、それに複合システムで、まずリスニング力、語彙力養成を中心とした学習をする。その後、それらを25セット集積した「総合システム」と、日本人教師、外国人教師、教育機器が協力し、自然な環境を加え、さらに「抜け」や「無駄」が出ないような配慮を加えた構造となっている。

6. 文京女子大学外国語学部への提案

6-1. 豊富な学習機会を生かす

本学の外国語学部は、質、量の両面において非常に恵まれた学習機会を揃えているように見える。量的、質的、両面である。スピーキング、リスニング、ライティング、リーディング、それにコミュニケーション実習のための基礎科目の充実、語彙指導の意欲、チャットラウンジの構想などがそれである。地域・国際関連の授業、これも重要であるし、自由科目でさまざまな資格をとるための学習もできる、また留学制度も充実している。このように素晴らしい学習機会が質、量ともに整っている教育機関はあまりないのではないかと推察される。

さらに良いことには、本学園には幼稚園から始まって、(小学校がないようであるが)、中学校、高等学校、大学、生涯教育という連続性がある。ことばは人間の成長にともなって変化していくものであるので、人間と言語の成長レベルがマッチした形で学ばせることが理想であろう。その成長課程にそって教育が行え、研究ができ、指導が実践できるシステムが整っている本学園は、大変魅力のある教育機関であると考えられる。

6-2. システムを構築し機能させる

三ラウンド・システムの最大の特徴は、困難な問題点を直視した上で、容易にできることのみを行うのではなく困難でも効果をあげるために「すべきこと」ができるシステムを構築したということである。逆に、容易に実践できるが、あまり効果の期待できない指導とは、教材を繰り返し聞かせ、単に語彙や文法の説明をすることや、センテンス単位に和訳をしてみせる、音素や音変化の指導をする、テストをして正解を確認するといった指導である。

また、仮に三ラウンド・システムの中の一つ一つの要素が単独に存在したとしても、それだけで本当の意味でのコミュニケーション能力養成に必要な、真に望まれる効率的な大学教育が出来るかと言うと、それは出来ないと言わざるを得ない。わかり易いならば、自転車に乗ることの学習を例にとって説明できる。つまり、完全な形での自転車は非常に便利な乗り物である。しかし、タイヤがパンクしていたり、チェーンが切れたりしていたら、つまり要素が一つでも欠けていれば、乗り物としてまったく機能しなくなる。逆に重荷になってしまうことすらある。要素は全体がシステム化されないとまったく意味をなさないということである。学生のコミュニケーション能力を真に大学4年間の指導で実用レベルにまで養成しようとしたら、効率的に指導が可能になる、無駄や抜けのない「システム」を作り上げる必要があるのである。

テレビで英会話を指導しているというSoresi氏も上記と似た表現で、しかしまったく別の観点から我が国の英語教育を批判している。

Studying English in Japan: Japanese students learn about bicycle parts, not how to ride. Knowledge of nuts and bolts may be sufficient, but that won't move a bicycle. (Soresi, 1999)

6-3. 英語力養成のために不可欠な要素

語学力は以下のような3要素の関数として表せると言われることもある：

教材 × 学習計画 × 学習時間 = 英語力

つまり、英語力を大きく向上させるという目的の達成には、優れた「教材」と、緻密な「学習計画」、それに十分な「学習時間」がいずれも不可欠だということである。しかも、それぞれの要素がプラス(+)の記号でなく、カケル(×)の記号で結ばれているところにはとくに留意したい。3要素のうちの1つまたは2つが欠けても、または不完全でも、他の要素でカバーできるというものではないということを示しているのである。要素のどれかがゼロになれば、他がいくら優れていても結果はゼロになるということでもある。我が国の学習者がいくら時間をかけても英語力がなかなかつかない理由がこの辺から見えてくる。良い教材が、そして優れた学習計画がなかったのである。三ラウンド・システムの開発はこの問題を解決しつつあるという言い方もできるであろう。

7. まとめ

講演のサブタイトルには「TOEIC 800は夢ではない」とつけられていたが、それは事実、夢などではない、現実である。しかし、外国語学部が真に一流の学部だと言われるためには、TOEICスコアなどを目標に出すべきではないだろう。それはあくまで結果であって、「効果的、効率的な外国語教育ならば文京だ」と言われるようになったとき、TOEIC 900でもTOEFL 600でも問題ではなくなる。さらに、そのようなことを言う必要がなくなる、そのような日を目指して努力すべきなのであろう。本論執筆者としては、そうしたところに少しでも貢献できれば

ありがたいと考える。

(注)

- (1) TOEFL (Test of English as a Foreign Language) : 米国ニュージャージー州にある非営利団体, Educational Testing Service (ETS) により開発されたテストであり, 1998年の時点で, 主に米国やカナダにある3,000以上の大学, 短期大学が, 英語を母語としない留学出願者に対してTOEFLのスコアレポートの提出を要求している。年間, 約170か国, 80万人が受験しており, 英語力を測定するテストとしては世界でもっとも広く利用されているテストである。
- (2) TOEIC (Test of English for International Communication) : ETSと日本の国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会が共同で開発した英語のコミュニケーション能力を測定するためのテスト。現在, TOEIC-IPの受験者を含めると, 年間に世界の約50か国, 約150万人が受験しており, 国内の2,000以上の企業, 学校等でTOEICスコアが活用されている。

主な参考文献

竹蓋幸生, 『英語教育の科学』, アルク, 1997.

竹蓋順子, 「大学英語教育システムにおける複合システムの実践的研究」, 『言語行動の研究』, 第7号増刊号 (第二版), 千葉大学教育学部言語文化教育系英語科分野, 2000.

Childs, Marchal, *Language Testing in Japan*, Oxford University Press, Oxford, 1995.

Takefuta, Junko, *Development of Courseware for Teaching Vocabulary to Japanese Students of English*, Unpublished Master Thesis Submitted to Chiba University, 1997.

本論文は, 2001年5月22日に行われた, 筆頭著者による文京女子大学外国語学部開設記念講演, 「新しい英語教育: 三ラウンド・システム」の内容に必要な加筆, 修正を加えたものである。内容の一部(語彙指導システムおよび複合システムの構想と実験的指導のデータすべて)が竹蓋順子の修士論文, 博士論文の内容に基づいたものであり, 講演体から論文体への編集担当者でもあるので同氏を共同執筆者として加えた。

なお, 本誌には原稿に長さの制限があるため, 講演で使用した図表をすべて割愛してある。口語体の表現のままで図表を含めた講演内容は『言語行動の研究』第8号(2002予定)の同名の論文を参照していただきたい。